とある男の不幸な事故

大嘘憑き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある男の不幸な事故

【Ｎコード】
Ｎ１３５９Ｚ

【作者名】
大嘘憑き

【あらすじ】
アニメ●トに行く途中だった主人公。しかし、いきなりの腹痛に倒れ、死んでしまったら訳の分からないところにいた。その時であった神にリリカルなのはの世界へ送られた。「いやっほー！！」と意気込んだのはいいものの、他に転生者はいるわ、能力は欠陥品んだわ、もう散々だ。しかも、訳の分からん喋る宝石まで現れて！どうなる俺の人生！
この小説はキャラ崩壊などが激しいため、苦手な方はバックして下さい。

※この小説は不定期です。完結するかわかりません。

プロローグ（前書き）

お久しぶりです。大嘘憑きです。
今回は続くかわからないけど頑張ります。
ではどうぞ！！

プロローグ

ありきたりないつもの光景。中学ぐらいの男子がなぜか発育のいい空見町の女子の胸を見て興奮している。

そこには羽の生えた女の子がいてその周りはいつもにぎやか。そんな光景が続いていた。

俺は高校2年だが、そんな俺からしてみても微笑ましい光景だと思う。

俺は今日、アニ●イトにいくため電車に乗った直後だった。

「いたっ！」

いきなりの腹痛。そのまま俺はその痛みに苦しみながら意識がブラックアウトした。

思えば今日食べた賞味期限3年過ぎのチーズがいけなかったかもしれない。そんなことはないと思っていたがあったようだ。

思いゆく中で俺はそっと意識を手放した

――――――起きろ――――――

声が聞こえてくる

――――起きろ！――――

まただ。今度ははっきりとした

「はっ！」

俺はその声に跳び起きた。

『お主。アレを食べて死んだのはお主か？』

「あれって・・・・・・・あのチーズですか？」

『そうだ。やはりお主だったか・・・・』

「死んだって・・・・おれやはり駄目だったのか。残念だ」

『お主がアレを処分してくれたのか・・・・・ならわしがお主を生き返らせてやろう』

「え？」

『能力を一つだけやろう。さあ言うが良い。』

俺は言われるまま能力を適当に言う。それは俺が持っていたユウ・クリウッド・ヘルサイズのカードを見たときだった。

「じゃ。このカードのキャラが使っている能力で・・・・」

『わかった。では次に世界選択だ。お主にはある世界に行ってもらう。』

「ある世界？」

『いけばわかる。ではな』

そうして俺の第二の人生が始まった。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします

第一話　理不尽（前書き）

では、本編の方をどうぞ！

第一話　理不尽

結果からいいます。確かに転生はできました。親は何故かいなかったけど、そして俺はこの世界に来るとき決めたことがある。

「俺はハーレムを作る！！！」

そんな時期もありました。
しかし実際に能力を試しに使うと頭痛で2，3日休まないと行けなくなる。
って言うか・・・・・この能力・・・・欠陥品じゃねぇ？
そんなこんなで聖祥小学校に入学。実際に原作キャラに会ってきた。
しかし既にそのキャラには彼氏的存在（転生者）がおり一度は勝負を仕掛けてみたところボロ負け。
まあ実際には変装した俺がなのはたちに喧嘩を吹っかけてだけど・・・・・
まあ相手の能力が俺が手に入れた能力よりもはるかに強いわけでして、瞬殺された。
そんなことにめげず俺はいつものように学校に登校したのだった。

「おはっよー！みんな　元気か！！！」

これがいつもの俺のキャラだ。しかし反応が帰って来ない。みんな俺のことうざいやらキモいやらの視線を送ってくる。
多分俺はいじめというものに遭っているのだろう。

それを確信付けたのは今朝のことだった。いつものように登校して下駄箱に靴を入れて上履きをはこうとする。はこうとした瞬間

痛みに襲われた。俺は直ぐに上履きを脱ぎ捨てると中には画鋲が大量に入っている。
幸いにもすぐに脱ぎすてたため痛くはなかったが、普通の人をよそおるため保健室へ直行。これは悪ふざけが過ぎるということで先生にちくった。先生も対処してくれようとしたが、犯人は捕まらず、何故か俺は浮いた存在となった。
どうして？

多分これが行けなかったのだろうな。保健室に行った後平然と登校。いつもと変わらぬ挨拶。うん完全にいじめにきづいていない雰囲気だ。
ある日のことだ。またいつものように登校していると殺人鬼に襲われたり飲酒運転の人がひき逃げをしようとしていたり、学校に行くと花束が机に置かれていたり、廊下に出てたり、教科書がなくなったり、ありもない罪で万引き犯扱いされたりした。
それでも俺はあきらめない！！
そう俺は誓ったのだった。しかし事態を一転させた出来事があった。
ある日の放課後。クラス合同体育のことだ。先生は少し職員室に行って来るといいそこから出て行った。

「おい。直樹。なんでおまえまだ学校にいんの？」

少しがたいの良い男子だ。

「は？何って？そんなこと言われる筋合いはないな」

すると他の人達からもいろいろと言われた。全て同学年だ。

「さっさと死ねばいいのに」

「あんたの顔なんか見たくないの」

「ほら帰れ帰れ！！ここはお前の居場所じゃねぇ。いやこの世界にお前の居場所はねぇよ」

今の言葉はまじイラっときたがそんなことに動揺する俺じゃねぇ。平然とする

「俺の人生だ。お前らには関係ない話だろう。」

「関係あるんだよ。特にお前の顔が一番気に食わねぇ」

なにこのいじめ？昔聞いたことがある言葉を行ってみよう。

「いじめかっこ悪いよ」

「はぁ～何言ってやがるてめぇ」

そういって殴りかかってきた。俺はその殴りをよけもせずに受けた。そしてよろっと立ち上がる。

「はぁはぁはぁ。なぜ殴った。」

「はぁ？殴られて当然だろう？お前が悪いんだから」

次に女子どもにボールを投げられた。しかも原作キャラまで混じっている。どうして？

しかもなぜかボールに混じって魔力弾が飛んでくる。・・・・・・・・・・・・普通当たったら死ぬレベルだぞ？

俺はボールに当たり倒れなんとか魔力弾をよけた。

誰かが舌打ちするのが聞こえた。確信犯だなこいつ。

「痛てぇ。はぁはぁはぁ。」

それ以外発する言葉がなかった。そして一人がどけという合図を送った瞬間。俺に向かって一本の槍が飛んできた。それは正しく転生者が放った槍『ゲイボルク』確実に心臓を貫く技だ。俺は痛めている身体を無理やり起こし、それをよけた。だがやりは追ってくる。俺が

もうだめだ。と思ったときだった。

「お前ら！なにしてる！！」

いきなり教師が現れた。俺はそれから意識を手放した。

目が覚めると病院の一室だった

隣には俺を助けてくれた教師。男性。がいた。

「俺は助かったのか・・・・・・・・・・・・」

すると教師は俺に向かってこういった

「今回はお前が悪いのか？」

は？なにこいつ？この現場見て俺が悪いって？はは泣きたなるねぇ

「あの場にいた奴らは全員お前が悪いって言ったがどうなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無言で返す。はっきり言って返す言葉がなかった。俺が何と言

ったところで信用してくれるかわからない。しかも同学年全て敵だぞ！！！

「まあいい。落ち着いたら話してくれ。」

そう言って去っていった。

退院後

人目を避けて病院の近くの森を抜けるためそこを通った。ちなみに俺がいるのは現時点で小学４年生ＡＳ終了後だ。

「ああ。どっかに俺の人生を変えてくれるものが落ちてないかな」

そう言った瞬間頭痛に苛まれ、あたりが暗くなり意識を落とした。

第一話　理不尽（後書き）

直「さてさてやってきたぜ俺の時代！！」

作「何を言っているんだ？」

？「そうですね。まあ次からは私が活躍しますけど・・・」

直「お前の活躍なんてねぇよ！」

？「そうなんですか？」

作「・・・・さあ？」

直「おい！ちゃんと答えろよ！」

作「・・・・・」

？「・・・・・」

直「どうして二人とも無言！！」

作「さあて、無駄にハイテンションな馬鹿は置いといて・・」

直「・・・おい。今馬鹿って言わなかったか！？」

？「そうですね。じゃあさっさと終わりますか。」

直「お前にまで無視された！？」

作「では次回で！」

直「無視するんじゃねぇ！！」

第2話　22個目のジェルシード？（前書き）

新キャラ登場！！
さてさてどうなる？主人公の運命は！？

第２話　２２個目のジェルシード？

目が覚めると青空だった。
たぶん一週間ぐらい寝てたのだろう。周りは木のざわめきと鳥の鳴き声しか聞こえない。
意識が回復していくに連れ手に何かの違和感があった。それを握り締めていたものをそっと開ける。
そこには青色に輝くものがあった。宝石だ。よおく見てみるとシリアスナンバー２２と書いてある。
すぐにジェルシードだと分かった。しかし不自然である。確かジェルシードは原作では２１個しかなかったはずだ。
でも、もう無印が終了しているからこれはラッキーなのか？
そうだ。これは神が哀れな俺にくれた贈り物だ。よし早速願いをかなへと貰おう！！

「ジェルシードよ。俺の願いをかなえてくれ。俺の願いは・・・・・・・平凡に人生を全うすることだ！！！！」

するとジェルシードは光出しそして・・・・・・・・・・・・
「はぁ～。うるさいですよ。もっと静かにしてください」
喋った。
「はい。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

は？

「なぁ聞きたいことがあるんだけど・・・・・・・」

「なんですか？」

「お前ってジェルシードだよな？」

「そうですが？」

「ジェルシードって喋るの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ」

いきなり喋らなくなった

「ってもう遅いからね！喋っているから・・・・・・・それに俺の願いは叶えられたのかな？」

「それはあの平凡がなんとか？っていう話ですか？無理です。自分で叶えて下さい。」

まさかのリアルアドバイス！！宝石にここまで言われるとは思ってなかったよ！！！！

「それはそうとして・・・・・・・」

話を流された！！！！

「あなたが私の主ですね？」

「は？なにをいっているんですか？」

「私の封印を解いてくれたのがあなたです。よってこれより彼方に従います。」

何故？しかもこれってロストロギアだよね。これ所持してる時点でおれ一種のロストロギア不法保持者だよね。次元犯罪者
まっしぐらな人生じゃねぇ？

「嫌だ。俺はもっとまともな人生を送りたいんだ！」

そういってジェルシードを投げ飛ばす。そして家へ直行した。
家に帰ると絶句。なんと家が・・・・・・・火災に合っていた。
そしてポケットに違和感があった。それはあのジェルだった。

『全く。いきなり投げ飛ばすなんてダメじゃないですか。』

これはおそらく念話だろう。頭に響いてくる。

『なんでお前がここに！！！』

『それはですね。一度契約したものは死ぬまで私と一緒ですよ。』

ということは俺って結局犯罪者になるしかないのか？

『まあそういうことです』

心読まれた！！

理不尽だ。しかしなぜ家が燃やされているのだろう？
その理由はすぐにジェルが教えてくれた

『それはですね。多分あの子たちにせいだと思います。』

見ると原作キャラが慌てている。なのは達だ。

『たぶん訓練中に偶然攻撃が当たったと思われます。どうします？』

『なあ理不尽なこと多くね？俺なにかした？』

『多分そういう運命なのでしょう。ご冥福をお祈りします。』

・・・・・・・・・・・・あの中には俺のだいじなものがいっぱい入っていたな。具体的に言うと今まで集めた色々な物達・・・・最悪だ。
俺はその場で泣きわめいた。あたかも普通を装って。

「誰だよ。こんなことした奴は・・・・・・・・あそこには俺の俺の両親の写真や遺品があるんだよ。返せよ。俺の家を返せ！！！！！」

周りを気にせず絶叫。さすがに気の毒だと思ったのだろう。周りは俺を慰める言葉をかける。
そして消防車が到着したのは家が完全に燃え尽きた後だった。

「殺すころすコロス殺す。こんなことした奴全員殺す。コロシテヤル！！！！！」

あたりを気にせず、逃走した。

多分原作キャラはここまでなるとは思ってなかったのだろう。これは一種の縛りだ。これから彼女たちは忘れることができないものとなるのだろう。
森に戻った俺は一応領主に許可をとり・・・・・・・ていうかこの森じたい俺の森だったので家を建て、そこで暮らすことにした。
あの放火事件以来俺は学校に入っていない。
家にはゲームと、たたかえるようにジェルと練習する場所だけ。
空腹は頭痛を追ってまで空腹感がないことにした。
ゲームに没頭する毎日。それから俺とジェルが出会って1年が過ぎた。
どうやらジェルは人間にもなれるらしい。魔力を消費するけど・・・
誕生日を祝ってやろうと思い最近噂の翠屋。にいこうと決意した。
別に原作キャラがいようがいまいが関係無い。

これが俺の人生だから。

そして気がつけば翠屋前

カランカラン〜

「いらっしゃいませ！」

現れたのは多分高校2年ぐらいだろうの歳の人。通称剣道女。

「誕生日を祝いたいんです。ケーキをくれませんか？」
ほぼ実際は俺が食べるけど・・・一応あいつと出会って一年だ。お祝いぐらいしてやろう。

「少々お待ち下さい。」

そういって俺は窓を眺めながら待つことにした。すると後ろからいきなり声をかけられた。

「大丈夫か？」

それは若い男だ。たぶんこのひとが月村の姉と付き合っているエロゲ主人公の恭也さんなのだろう。

「なにがですか？」

「いやなぁ。君の雰囲気が普通の人とは全然違う意味で危ないと思っただけだ。」

「そうですか・・・・・・・・・・・・」

俺は暗い雰囲気で言う。

「ちょっとついてきてくれないかな」

言われるがままにいついて行った。
少しすると道場らしき建物に入った。
どうしてこんなところに連れて行くんだ？と思ったが気にせず見た

「どうしてこんなところにきたんですか？」

「どうしてだと思う？」

「わかりません。俺・・・・・・・もうそろそろ帰らないといけないんで・・・・・・・・」

「ちょっと待て。話してくれないか・・・・・・・どうして君がそうなったのか。」

話したところでどうなるんだ？と思ったが自然とどうなったのかが口に出てしまった。気付けば泣いていた。いつぶりだろう？最後に泣いたのは1年前の火災の時だ。

「すみません。取り乱してしまいました。・・・・・・・・・・・・・・・ありがとうございます。」

お礼を言い金を渡してその日はまっすぐ家に帰ったのだった。

「ただいま」

「お帰りなさいマスター。顔色がよくなってますよ。」

「まあな。ジェル。明日から俺また学校いこうかな。」

「どうしてですか？」

「このままじゃ父さんや母さんに顔向けできないじゃん。」

「それは良い心がけです。私は反対しません。」

快く納得してくれたジェルに俺はまた泣いた。俺って本当に弱いなぁと改めて思ったときだった。

第2話　22個目のジェルシード？（後書き）

作「それにしても災難だったな。お前」
直「そうだよ。なんで俺だけこんな運命なんだろうな・・・」
ジェ「それは作者が意図的にやっている以外ないと思いますよ？マスター」
直「そうなのか？作者・・・もう少しは改善してくれ、俺の人生」
作「無理です。」
直「即当！？何で！？」
作「だってそのほうが面白いからですね。」
ジェ「ああ。その意見なら私も賛成します。」
直「ジェルまで！？どうしてだ・・・」
作「それは・・・」
ジェ「この物語のタイトルが・・・」
作&ジェ「とある男の不幸な事故だから（笑）」
直「・・・・」
作「まあ話が進めば考えてもいいですけど・・・」
直「ホントか！？」
ジェ「ええ。話が進めばですけど・・・」
直「そうか・・なら俺頑張るよ！」
作「（バカでよかった。）そうですね。じゃあ次回でお会いしましょう。」
直「俺の活躍を楽しみに！！」

第3話　帰ったきた学校。（前書き）

直「ククク。今日から学校・・・ワクワクするな！！」

ジェ「どうしてですか？」

直「それは・・・友達がいるから？」

ジェ「あれ？マスターって友達いないんじゃなかったですか？げんにいじめられてたし・・・」

直「う、うるさい！と、とりあえず友達一人ぐらい作ってやる！！」

ジェ「それじゃあ頑張ってください」

第3話　帰ったきた学校。

翌朝。

聖祥小学校の制服に身を包み学校へ向かった。
教室の前にいくと何人かの生徒は来ているようだ。
俺は意を決して1年前までしていたいつものように学校に入った。

「っははは。ようみんな俺は一年ぶりに帰ってきた！！！！」

入った瞬間沈黙。
多分俺のことなんて忘れていたのだろう。
だがしかし、これから何があろうと俺は学校に行くと決めたのだ。

「あれ～どうしたの？みんな反応薄いぜ。ほら1年前見たいにつかかってこいよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さぁ今日から俺の新たな一日が始まるぜ。今日から俺が主人公だ！！！！」

思いっきりぶっちゃけます。これ相当はずいけどやるしかない。
チャイムがなり席についた。俺が来ていたことに驚いた教師もいたが、何よりクラス全体の雰囲気が重かった。
幸いにもクラスにはなのはと転生者2人は休みでラッキーと思ったが油断したら原作キャラとイレギュラーに殺される。

あまり近づかないようにしよう。うんそうしよう。

「弁当ってやっぱり屋上が一番だよな」

『全く誰に向かって言っているんですか？』

『ここにいる全生徒にだよ』

『・・・・・・・・・・・・・・・』

一人で弁当を食っていると一人の女子が俺の元にやってきた。このこもしかて・・・・・・・・・俺に気があるのか？

「何でまた登校してきたのよ。気持ち悪いから喋らないでくれる？」

「これはこれは俺がいたとき学年2位だったアリサさんどうしたの？」

「それがむかつくのよ！！」

どうやら怒っているらしい。まっ俺の怒りに比べたらたいしたことないだろうけど。

「それで？なにか用？自称学年1位さん？」

「あんたねぇ。」

「それなら今度のテストでかけようよ。今度のテストで俺があんたに負ければ俺は学校に来ない。もう。しかし、俺が勝てば、あんたは俺と付き合う。結婚を前提にして・・・・・・どうだ？」

「そんなの乗るわけないでしょう！！！」

うーんあとひとおしだな。あの杉崎君に出来て俺にできないわけないからな。美少女ハーレム。

「負けるのが怖いのか？それでもあの家のお嬢様なんだな。負け犬家か。ははははくくく」

どうやら怒りが頂点に達したらしい。かなり来ているようだ

「なら勝負よ。私が勝ったらあんたは出ていく。私が負けたらあんたの言うこと何でも聞いてあげるわ。」

「ちょっ！アリサちゃん。いいのそんなこと言って！！！」

「大丈夫よすずか。あたしが負けるわけないじゃない。」

そういって食い下がった。テストは来月。それまでにテスト範囲を勉強だ！！

こうして俺はアリサ。（美少女）を手に入れる為にもう勉強が始まったのだった。

この勝負は瞬く間に学校中に広がった。アリサを勝たせようとするために妨害工作に走ったモノもいたが、アリサがそれを阻止。

どうやら真剣に勝ちたいようだ。妨害はできなくなり、それからみんな見守った。

そして結果当日。みんなが期待している中、発表された結果は。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まず5位　田中　雄平。（転生者）　９５点

4位　フェイト・T・ハラオウン　96点
3位千堂守　（転生者）　97点
・・・それにしても転生者・・・力ぐらい抜いてやれよ・・・・頑張っている子供もいるんだし・・・まあ俺も言えないけど
そして1位2位同時に発表された。結果は・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
「まず点数からいう。一位100点　2位　99点だ。これは誇っても良い点数だ。」
そして発表。
さて結果はどうなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

発表

1位　不動　直樹　100点
2位　アリサ・バンクス　99点
その差　一点差。

あまりの嬉しさに叫んだ

「いよっしゃぁぁぁぁぁぁ――！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「そんな」

「嘘だろ・・・・・・・」

ふと後ろを見るとみんなして泣いていた。・・・・・・・・・
これ俺が悪役じゃねぇ？

「アリサちゃん・・・・・・・」

そう叫んだのは月村さんだ。さすが親友思いなだけある。

「約束だ。」

俺はこの場の空気をぶちこわす発言をして、来週の土曜日デートに誘った。
それを渋々承諾し、この場はお開きになった。
家に帰ると爆睡した。はっきり言って1日3時間は子供ににが重い。
そういうわけあって睡魔に襲われたのだった。

第3話　帰ったきた学校。（後書き）

ジェ「・・・何かマスターがいじめられていた理由・・わかる気がします・・」

直「どうしてだ！？」

ジェ「・・・気づいてないんですか？マスター？」

直「・・・・・ん？」

ジェ「自覚ないんですか・・・。（流石は私のマスター。予想以上の馬鹿でした。）」

直「おい！今馬鹿って思わなかったか？」

ジェ「いえいえ。ソンナコトアリマセンヨ？」

直「そうか。ならいいんだが」

ジェ「それにしても作者遅いですね。」

直「あああいつなら先に帰った。なんでもやらなきゃいけないことが山積みらしいから。」

ジェ「どうせ、マスターのせいなんでしょうけどね。」

直「それより、もうそろそろお開きだ。残念だが今日はここまで。」

ジェ「では次回お会いしましょう！！」

第４話　デートとゲーセンと本当の理由（前書き）

直「いえーい、今回もやってきましたこのコーナー！」

ジェ「そうですね。マスター。別に何もやってないのにこのテンション。さすがマスターですね。」

直「まあ褒めるなよジェル。」

ジェ「（別に褒めてませんけどね・・・）それよりこのタイトルはなんですか？」

直「なんか作者が思い・・いやなんかな、タイトルは別に関係ないんだ」

ジェ「危ないところでしたね。マスター。」

直「そうだな。危ないところだった、・・・だが！本編を見てくればわかる人もいるかもしれん。なら早速本編に行きますか。」

ジェ「行ってらっしゃい！」

直「お前も行くんだよ！！」

第４話　デートとゲーセンと本当の理由

次の日学校に行くと原作キャラとイレギュラー達が勢揃いしていた。何故イレギュラーとわかったかというと、みんな俺と違い莫大な魔力を秘めていたからだ。
俺はいつもどおり挨拶し自分の席につく、そしていつもと変わらない本『科学の神秘と魔法使い』といういまどき珍しすぎる本を読んでいた。
ちなみにページ数は３５０ほど。
すると後ろから声をかけられた

「おい。お前。」

振り向くと男がいた。とりあえず無視という方向で

「おい！きいているのか！！」

「俺は男には興味無い。阿〇さん宜しく！！」

俺は携帯から阿部さんにメールを送るとすぐきてくれた。あの音楽と共に。

『やらないか。やらかいか　やらかいかい』

後の方で絶叫していたのが聞こえたけど無視の方向で。なんで知っていたかというと話は長くなるからダメだ。

「あのぅ～ちょっといい？」

次はなんとあの原作キャラ主人公の高町　なのはさんでぇす！！すげぇ！！ボールぶつけられたときはこんな奴だったんだ・・・・・・と

絶望していたがまじかで見ると可愛いな。ぐへへへ。おっと涎が出かけたぜ

「なに？」

さすが俺。ここはクールに答える。

「その・・・・・・・・・・・・・・し・・・・・・」

おどおどしている。しょうがない話を変えよう。

「ちょっといい？この本の話なんだけどさ・・・・・・魔法がもしあったとしたら君は人（俺）を攻撃できる？何も罪もない人。ただむかつくだけって言う理由でさ」

たぶん相当混乱しているのだろう。昔のことがあるもんな。

「それはそのぅ・・・・・・・・」

「俺もね。退院後家に帰ったらね。火災あってたんだよ。それが何もないところから出てた。魔法みたいにね。それで俺の家族の遺品が・・・・・・思い出が全てなくなったんだ。・・・・・・・・・・・・ああ。あるにはあったな。一つだけ。形見だけど。これをなくしたら本当に俺はおかしくなるかもな。誰がやったんだろう？俺の家を燃やした犯人。・・・・・・・・・」

俺はそういって目を向けた。原作キャラ達は何故かビクッ！としている。

「どうしたの？顔色が悪いよ？」

「な、なんでもないよ」

「そうなの？保健室へ行ってきたら？」

「だからなんでもないの」

「ふ～ん？で？話って何？」

どうやら完全に忘れていたらしく後でねと言われた。

放課後　また呼び止められた。

「なに？高町さん？それに俺のことをクズしか思っていないその他。」

「それは・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・」

いや！ここは否定してくれよ。俺泣いちゃうぞ。本当に泣いちゃうぞ。

「で？用はそれだけですか？ちなみにアリサさんの件はあっちも承諾済みだったので変えることができませんよ？」

「そんな・・・・・・・・」

「きみは優しい友情で人のプライドを気づつけるきかな？そんなのは本当の友達なの？」

俺が思いっきり攻めているとうしろからまた声が聞こえた。

「こういう奴に付き合わせないのも本当の友達だ。」

「これはこれは守君。でも、君達は最低な人間だってことを忘れてはいけない。昔のことは結構根に持つタイプの人なんですよ。俺。というわけでさよなら。」

そうして帰っていた。その後姿は何か寂しさを感じたという。

日曜日。

今日はあの・・・・・・・・・あの！アリサさんとデートの日だ！！テンション上がるぜ！！！

『五月蝿いです。マスター』

『って！なんでいるんだよ！！』

『それはですね・・・・・・・・・一応見張りですよ。貴方達についてくる数名の魔力反応があります。おそらくあの高町とか言う人のものだと』

『そうか・・・・・・・・・だが気にせずいこう！！！』

『流石マスター。立派です』

駅前

そこには一風変わったベンツが止まってあった。その中から聖祥の制服らしきものをみにつけた生徒が現れた。どうやら俺に私服を見られたくないらしい。少し思考して声をかける。

「おっは～。今日も可愛いですね。」

「べ、べつにあんたなんかに言われたくないわよ」

ぐはっぁ！！なんて威力だ。俺死ねる

『マスター大げさですよ？どうせ俺を倒しても第2第3の俺が・・・・・・なんていうんでしょ？』

『どうしてわかった！！』

どうやら主人公は単純だったようだ。

「じゃぁ行きますか。」

「どこに行くのよ。」

「俺の好きな場所かな。」

そう言って俺が連れて行った場所はプラネタリウムだった。ここは知るひとぞ知る場所だ。休日なのに俺達しか来ない。

「ここは・・・・プラネタリウム？」

「そうだよ。」

そして星の神秘を堪能した後、ゲーセンへよった。

「ああ。五月蝿い！！」

「だってここはゲーセンだからね。何のゲームからやる？」

そう聞くとどうやら前々から興味があったクレーンゲームや音楽ゲームを選択した。どうやら楽しんでいただけたようだ。

こんな姿が学校でも見れたらいいのにと思ったのは俺だけだろうか？

気が付くとすでに5時近くになっていた。帰り際に俺は駅まで送っていこうと話しながら言った。

「ね？今日は楽しかった？」

「どうして・・・・・・・その・・・・・」

「ん？人間やっぱ笑顔が一番だと思うんだ。その魅力に俺はいいと感じる。例えいじめられようとも汚されようとも、笑顔を捨てなければきっと素敵な人生を送れると思う。」

「素敵な人生？」

「そう。それが俺であり、俺そのもの。俺から笑顔がなくなったときはきっと・・・・・・・・・」

それ以上の言葉はでなかった。いや出せなかったのだろう。どうやらその言葉を考えるまでには至らなかったのだろう。

「じゃあね。また今度。」

そう言って俺は去っていった。

第４話　デートとゲーセンと本当の理由（後書き）

ジェ「マスターかっこいいですよ！！」

直「・・・・・」

ジェ「きっと思い出したら赤面ですね」

直「頼むからやめてくれ。」

ジェ「マスターがそう言うなら・・・まあ録音器の方は既にダビングしてネットに・・」

直「おい！お前何ネット公開とかしようしてんの！！」

ジェ「いやいや。マスター。もうすでにやってますよ？」

直「俺道すら歩けなくなった！？明日学校行くとどうせみんな見てくるだろうな。」

ジェ「いいじゃないですか！普段だったらあんまりいてもいなくても同じ人が次の日には有名人みたいなことを体験できるんですよ？」

直「それはいじめの対象になっていなかった暗い超能・・・嫌なんでもない。」

ジェ「今すごく気になる言葉がでてきましたが・・・まあいいでしょう。今回は長話しすぎました。」

直「そうだな、下手したら本編より長いんじゃないか？」

ジェ「いいんですよ。そこのところは。ではマスター最後の締めを！！」

直「え！俺にふる？・・・みんな！また次回出会おうな！」

第5話　ミスと否定と次元犯罪者？（前書き）

ジェ「マスター！いよいよこのタイトルの本編的ものがありますよ？」

直「・・・・・ああ・・・・」

ジェ「どうしたんですか？そんなに暗い顔して？」

直「見ればわかるよ。」

ジェ「そうですか・・・ならマスターが沈んでいる理由を本編で見てみましょう！！」

第5話　ミスと否定と次元犯罪者？

あのデートの日から数日後俺はいつもと変わらず登校していた。
同学年の生徒とは未だにうまく行ってないが、それなりに充実した生活を送っている。
だがこの束の間の平和は長くは続かない。
それはある日のことだった。
「はぁ～今日も一日疲れたな～」
と家にてジェルを眺めていた時だ。
「でも、本当にジェルシードは２２こあるんだな。知らなかったぜ」
無防備でそういうことをほざいているとチャイムが鳴った。
こんな山奥に来る人が誰だか知らないがもの好きもいるもんだと思い、扉を開けてみる。
「はい。今開けます。」
「こんにちｈ」
ばたん。
なんかさ。

原作キャラたちがさ俺の家の目の前にいるんだ・・・・・・・どうして？もう一度確認してみる。

まだいる。

どうやら俺に会いに来たようだ。はっきり言って来るな！！と叫びたい。

だってろくなことにならないもん。

『マスターどうします？』

『まずどうしてこうなったかだな』

『多分だと思いますけど・・・・・管理局の人工衛星スパイロボにさっきの会話が聞こえてたりするかもしれませんね。』

『そんなわけないだろう？』

するとまたチャイムが鳴った。

「ああうるさいな。なんですか？って言うか休日まで俺をいじめにきたんですか？それでもあの高町家の人間ですか？って言うか休日ぐらいゆっくりさせろ！！！」

思いっきりほざいた。どうやら迫力に負けて言葉が出ないようだ。

「で？何しに来たの？用がないんだったら帰ってくれる？めんどいしうざい。」

これが家での俺のスタイルだ。学校とは大違いなのだ。ははは

※実際原作キャラがいるからです。

「それはその・・・・・・・・・・・・」

「うちらはちょっと用があるんよ。入ってもかまへん？」

なんで？

「嫌だよ。そんなの・・・・・・・・・部屋散らかってるし・・・・・・・・それによく知らない人を部屋に入れちゃいけないって死ぬ前に母さんが・・・・・・」

ちなみにこの世界に母さんは存在してませんよ。父もそうですが・・・・・・・

「・・・・・・はやて　なのは　やっぱりやめよう？」

フェイト

君は素敵だ。

「それもそうやな・・・・・・・・・単刀直入に聞くけど、君は魔道士なん？」

いきなりそんな発言来た！！しかし今はちょっといじめに耐えている普通の子なので普通の反応をしよう。

「ちょっと待っててね。」

懐から携帯を取り出し連絡する

「もしもし。精神家ですか？ちょっと頭がおかｓ」

全部言おうとしたところで携帯を折られた。理不尽だ！！

「何言ってるの！！」

「だっておかしいじゃん。いきなり魔導師とか。頭打ったの？それとも実は初めから電波系？」

あくまでしらを切る。すると念話が聞こえた。

『マスター言い過ぎですよ？一応美少女ですけど・・・・・・』

いや！間違えなく美少女ですよ！！

『ならどうして拒否するんですか？』

『おれがこのままこいつらと付き合ったら・・・・全力全壊で周りの奴らに消されるからな』

『流石マスター！自分の状況ぐらい分かっていたんですね』

この宝石・・・・・・捨てたろうか？

『嫌ですね。捨てたところで帰ってきますよ』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ！そうだ！ねぇお母さんのかたみ見せてくれない？」

「なんで？俺はもう失いたくないよ。たったひとつのかたみだもん。」

」

「大丈夫だよとらないから。」

「目が笑ってないよ？」

本当に目は笑ってなかったのだ。

「なのはちゃん。やっぱり家宅捜査を・・・・・・・・」

「もしもし、警察ですか？不法侵入でｓ」

「だからまた！！！」

いや当たり前だろ！！！普通おかしいし、って言うか俺の家を知っていることに驚きだよ！！！

「ねぇなんで俺の家がわかったの？もしかして俺の家を燃やした犯人？」

「違うよ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・たぶん・・・・・・・・・」

いやたぶんって何！！今明らかにおかしい単語が聞こえた

「はぁ～見せてもいいよ」

「ほんと！！」

「ただし条件がある！！」

「条件？」

俺が条件があるというと首をかしげた。あらかわいい。じゃなくて

「簡単だよ・・・・・・・・・高町さんの彼氏とハラオウンさんの彼氏、八神さんの兄を・・・・・・・殺してくれるならね。」

どうやら目付きが変わったようだ。どうしよう？

「ははは嘘だよ。そんなことするわけないじゃん。でもこれは大切なものなんだ。例え見せたところでやらないし、もしその後君達が取ったと判明したら高町さんの家を燃やすだけだから。」

笑って冗談を言う。まあ実際は冗談じゃなかったりもする。

「なんで私だけ！！！」

と聞こえたような気がするが無視に限る。

「はいこれ。」

そういってジェルを渡す。ちなみにわたしたところでこいつは帰ってくるので安心できる。

「わぁ綺麗！！」

など絶対小学生が言いそうにない言葉を発言していた。どうやら念話を使っているようにも見える。

「いいな。欲しいな。これどこで売ってるん？」

やはりきたか。このあと数年したら管理局の狸って言われていたのはこの頃からだと今わかった気がした。

「これはもう売ってないんだ。」

「そうなん？でもやっぱりキレイやわ。・・・・・・・・・これ売ってくれへん？」

よしきた。売ろうかなこれ。どうせ帰ってくるんだし

『マスター完全に詐欺師になろうと思ってますね？』

『ああ。そういえばどうして俺これ売って金稼ごうとしなかったのかな？』

『馬鹿ですね。しかし今回は駄目ですよ。封印されたら私の人生終わりですから。』

『お前を持ってたら俺の人生の方が終わりだよ！！！』

『ならこうします。』

そういっていきなり魔法陣が現れた。いきなりの出来事に両方戸惑う。そして俺はまた、意識を手放した。

なのはサイド

今日はこの付近に最近現れたというロストロギアを回収するという作業があります。今回は私、フェイトちゃん、はやてちゃんの3人でこの任務を当たります。・・・・・君達は別の任務が入っているので・・・・・・・・
それより今日はクロノ君から説明を受けるところです。

「来たか。」

すると後ろから黒い服を着た少し格好いい男の子が入ってきました。

「義兄さん!!」

「「クロノ君」」

「今日は最近発見されたと思われるロストロギアが君達の街にあるとの情報が入った。」

「私達の街に?」

「ああそうだ。そしてそのロストロギアを所持しているという少年がいるとの情報も。」

「誰なん?それ?」

はやてちゃんが聞いている。

「それは君達の小学校の生徒しかも同級生とまで出ている。」

それは予想を斜め上に行ったところだった。なんと私達と同学年に

いるのだから。

「その子の名前は・・・・・・・不動　直樹という少年だ。」

その言葉を聞いた瞬間私達は戸惑った。不動　直樹。その少年は一年間学校にはこず、最近来たと思ったらアリサちゃんとデートをかけた勝負までした人。そして私たちが昔いじめていた人でもあった。流石にそれは私も戸惑った。はやてちゃん達も戸惑っているようだ。不動　直樹。みんなから本当の心『レイジングハート』と言う二つ名までもらっていた人。学校の嫌われ者。でもその発端は誰も知らない。

ただ顔をみたらむかつくというだけでいじめられそのいじめに耐えつつ学校に来ていた存在。それが彼だった。

そして私たちが近付きたくない理由はまだある。それは一年前のことだ。私達は魔法の練習をしていて、少し砲撃のミスをした。しかしそれは違う所に行き一軒の家を壊した。それが彼の家だった。それから何があったのか覚えていない。そしてそれから1年学校にこなくなった。

それもそうだ。家がなくなり、親が死んでいて、その遺品も焼かれたのだ。普通の人だったら耐えられない傷。それを1年で克服した。まあ話は長くなったが、彼だけにはもう関わりたくなかった。しかしこれも任務だ。私達は渋々承諾した。

「どうする？なのは？私あんまり近付きたくないよ」

「うちもや・・・・・あんなことしてもうたしな。・・・・・」

「みんな同じ気持ちなの。でも頑張って行かなきゃ」

そういって私達は無理にいった。家は人工衛星スパイロボの情報に

より探し、やっと森の中で一軒家に出会った。私達はチャイムを鳴らした。

「はいはい誰ですか？」

その返事はなかなか早かった。しかし、開けた瞬間なぜかしめられた。

またチャイムを鳴らし続ける。

「ああうるさいな。なんですか？って言うか休日まで俺をいじめにきたんですか？それでもあの高町家の人間ですか？って言うか休日ぐらいゆっくりさせろ！！！」

多分これが彼が言った（私達に）はじめての本音だろう。

「で？何しに来たの？用がないんだったら帰ってくれる？めんどいしうざい。」

多分思いっきり何かをしていた途中だったのだろう。なぜか切れているの

「それはその・・・・・・・・・・・・」

「うちらはちょっと用があるんよ。入ってもかまへん？」

ナイスだよはやてちゃん！！しかしそう簡単には行かなかった。

「嫌だよ。そんなの・・・・・・・・・部屋散らかってるし・・・・・・・・それによく知らない人を部屋に入れちゃいけないって死ぬ前に母さんが・・・・・・」

よく知らない人って言われた！！！確かにそうだけど・・・・・・・・・
同じクラスなのに・・・・・・・

「・・・・・・はやて　なのは　やっぱりやめよう？」

フェイトちゃんが止めてくる。

『なんでなの。フェイトちゃん』

『多分何言ったって無理だよ。それより聞いてみよう？ロストロギアの事？』

『それもそうやな』

「それもそうやな・・・・・・・・・単刀直入に聞くけど、君は魔道士なん？」

はやてちゃん！！それはやすぎ！！しかもみたところ私達になんか暖かい目を向けてきている。なんか嫌な予感がするの

「ちょっと待っててね。」

懐から携帯を取り出した。そして・・・・・・・

「もしもし。精神家ですか？ちょっと頭がおかｓ」

バキ　いつの間にか私は携帯を取り上げ壊してしまった。

「何言ってるの！！」

「だっておかしいじゃん。いきなり魔導師とか。頭打ったの？それとも実は初めから電波系？」

普通の人ならこういう反応するのもおかしくない。本当に普通の人なのかな？

「あ！そうだ！ねぇお母さんのかたみ見せてくれない？」

私は学校で言っていた事を思い出し、訪ねてみる。もしかしたらそれがロストロギアかもしれないの

「なんで？俺はもう失いたくないよ。たったひとつのかたみだもん。」

「大丈夫だよとらないから。」

「目が笑ってないよ？」

このとき私は初めて自覚したと思う。演技は私に向いていないとここではやてちゃんから提案を受けた

「なのはちゃん。やっぱり家宅捜査を・・・・・・・」

「もしもし、警察ですか？不法侵入でｓ」

「だからまた！！！」

でもそれはさすがにダメだと私も思った。勝手に上がるのはいくら何でも許されないと思うなの・・・それより何本携帯電話もってる

の？

「ねぇなんで俺の家がわかったの？もしかして俺の家を燃やした犯人？」

するといきなり質問してきた。確かに彼の家は近所の人は誰も知らなかったし、先生だって知らなかった。これはどう考えてもおかしい。

しかも、私たちがしたことも知っているかのようだ。

「違うよ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・たぶん・・・・・・・・・」

私達は弱気で否定した。すると彼は諦めたようでこういうことを行ってきた

「はぁ～見せてもいいよ」

「ほんと！！」

「ただし条件がある！！」

「条件？」

私達はその条件が聞きたかった。しかし帰ってきたのは最悪の条件だった。

「簡単だよ・・・・・・・・・・・高町さんの彼氏とハラオウンさんの彼氏、八神さんの兄を・・・・・・・殺してくれるならね。」

それは私達にはどうすることもできないもの。でも彼は真剣な目で見ている。すると彼はいきなり態度が変わった。

「ははは嘘だよ。そんなことするわけないじゃん。でもこれは大切なものなんだ。例え見せたところでやらないし、もしその後君達が取ったと判明したら高町さんの家を燃やすだけだから。」

なんだ冗談か・・・・・・・・・・・・・・驚いたの。でも・・・・・・・・・・・・

「なんで私だけ!!!」

そして私たちにそれを渡した。どうやら魔力を持っていたようで間違えないらしい。でもこれを奪うとなると話は別になる。もし私たちがとったら私の家は明日にでも火事になってそうで怖い。

『どうする？なのは？』

『どうしよっか？はやてちゃん。』

『ここでうちにふらんといて？』

『無理だよ。ここは腹g・・・・・・・頭のいいはやてちゃんの出番だよ』

『いま腹黒って言おうとせんやった？』

『まあまあ。それよりもどうする？』

『売ってもらったほうが早いんちゃう？』

『流石ははやてちゃん。やっぱり腹黒だね。』

「いいな。欲しいな。これどこで売ってるん？」

「これはもう売ってないんだ。」

「そうなん？でもやっぱりキレイやわ。・・・・・・・・・・これ売ってくれへん？」

そして少し考えているようだ。しかし次の瞬間だった。いきなり魔法陣が現れ私達。彼も戸惑っている。その瞬間かれはどこかへ消えていった。

そして彼の家が跡形も無く消え去ったの出会った。

これをみていた管理局員の人が計画犯と見て取り上げ、彼はD級次元犯罪者となったのだ。

第5話　ミスと否定と次元犯罪者？（後書き）

直「・・・これで俺も次元犯罪者か・・・」

ジェ「マスター、気を落とさないでください。」

直「だけど・・・」

ジェ「マスターは死なない限りどうせ次元犯罪者になるんですから！！」

直「俺の人生全否定！？それはお前が勝手にやったことだろ？」

ジェ「でも望んだのはマスターですよ？」

直「クッ！否定できない！！」

ジェ「これから始まるストーリーは私達にとって壮絶なものとなるかもしれませんね。」

直「そうだな。なら次で俺たちがどうなったか確かめてみるか・・」

ジェ「はい！じゃあ次回で！！」

第６話　寝言と危険と現実逃避（前書き）

ではでは投稿！！
この物語はあくまでリリカルなのはです。
特別ゲストで頭さえ潰されなければ活動停止しないあの方々が登場！
ではご覧ください！！

第６話　寝言と危険と現実逃避

目が覚めたら、いつもと変わらない空だった。周りを見渡すと所々に廃墟がある。どうやら町外れのようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・てっ！ここどこだよ！！」

いきなりの出来事に大きく叫んでしまった。すると不意に声がした。

『うるさいですよ。マスター。近所迷惑になることぐらい考えて下さい。』

『いやいや。お前が言うなよ。って言うかここどこだよ。』

『さあ？』

『・・・・・・・・・・・・ｒｅａｌｒｙ？』

『Ｙｅｓ。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

『まあ気を取り直してどこか人がいるところを探しましょう！！』

『はぁ～なんで俺ってこうも毎度毎度同じ目に・・・・・』

『前も言ったじゃないですか。マスターはこうなる運命だって。とりあえず安心してください！！マスターはすでに次元犯罪者です！

！』

『安心できる要素がねぇ！！！！！』

『まあまあ。アレが悪かったですね。いきなり転移が・・・・・・・
』

『すべておまえのせいだろ！！！』

それから俺はあてもないので近くにあった廃墟に入った。廃墟には人がいた形跡があり所々にいろんなものがあった。
そして不意に頭を殴られたような激痛が走ったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

目が覚めると・・・・・・・・・・・・・・知らない死体置き場だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何故？

どうしてこうなったんだ。俺に何が・・・・・・・・・・・・・・・
・

周りを見るとやはり死体。どれもこれも死体。生存者は？

『どうやらいないみたいですね♪』

『なんでそんなにノリノリなんだ？お前？』

『気分ですよ。それにしてもこんなにあったらゾンビでも出そうですね』

「ゾンビか・・・・・・・出て来たら面白そうだな・・・・・・・・
・・・あ・・・・・・・・・・」

さらに激痛が走りまた意識がブラックアウトした。

？？？ｓｉｄｅ

全てが終わってしまった日の前夜。俺は任務のため夜更かしをした。

「ふぅ～はぁ～。ねみぃ。」

朝おきて、昨日の任務の確認をした。今俺が追っているのはＤランク次元犯罪者共だ。容疑は人体実験というものだ。
この仕事は簡単だった。しかし最後に入っていた奴の言葉が妙に気になる。

「俺はこのままじゃ終わらない。最後に勝つのはこの俺だ！！はははは」

このときはただの負け惜しみだと思った。だが現実は着々と俺達に迫っていたのだ。

ぷるるるる。ガチャ

「もしもし。ティアか」

『うん。仕事大丈夫？』

「ああ。もう終わったよ。誕生日までには戻るよ。」

『本当？嘘じゃないよね？』

「ああ。本当だよ。楽しみにしててくれ。」

『何か嫌な予感がするの。なるべく早く戻ってきてね。兄さん・・・・・・』

「わかった。」

そういって通信を切った。それにしても兄さんか・・・・・・・・・・・いいな・・・・・・・・・・さて。ティアのプレゼントを買いに行くか。

この次元は第４５管理世界。この世界には人口約６４億人の人がいる。結構多いが、これも世界を管理する者にとっては別に大した数字ではない。

俺は執務官を目指しているが、昔の同僚から聞いて、この街のぬいぐるみが有名だと知った。ちょうどティアの誕生日も近かったのでついでに買っていこう。そう思って出かけたのだった。

ぬいぐるみ屋

「いらっしゃいませ～」

店員がそう声をかけた。確かに多くのぬいぐるみがある。

「犬のぬいぐるみはありますか？一番のお勧めがいいです」

ティアは犬が好きなので俺は店員に進めてもらった。

「これが良いです。それにしても彼女さんにプレゼントですか？」

「いえ。妹にあげようと思うんです。もうすぐ誕生日なので」

「いいお兄さんですね。はい５２０００円となります」

そういって店員にお金を渡し、そのぬいぐるみを持って店を出たときだった。

「痛い・・・あ・・あ・・・・たずけてぐれ！！！」

俺は悲鳴の方を見ると人が人を襲っているのだ。襲っている方を見ると首筋から血が湧き出ている。普通の人間なら即死レベルだ。それなのに動いている。・・・・・・・・・・・・どういうことだ？

すると周りがざわつき始めた。さっき襲われていた人はどうやら死んだらしい。これは殺人事件だ。そう思って前に出ようとしたときだった。

「アアアア”」

いきなりたって動き出した。奇声を上げながら。そいつを見ると腹に内臓がない。これはどこかの誰かが言っていた。内臓が無いぞ。なのではないか？と一瞬おやじギャグに走った俺を誰が責められようか・・・・・・・・・・・いやティアなら責めてもいいぞ。どんどん攻めてくれ！！！

はっ！そんなことしている場合ではない。周りを見る。どんどん周りが襲われていた。これはもう大事件だ。俺はディバイスを構えな

がらこういった

「管理局だ。直ちに暴行をやめなさい！やめない場合は攻撃する！！！」

しかしそいつらはこちらを向いて近づいてくる。俺は仕方なく撃った。それはそいつに直撃し、気絶した・・・・・・・・・と思ったがなんと立ち上がったのだった。

「くそっ！どうしてだ！！とりあえず。ここは危険です。直ちに非難してください。」

そういって誘導した。俺も銃が効かなかったので連絡を取りつつ後退した。

『誰か聞こえるか！聞こえたら応答してくれ！！』

しかし聞こえるのはノイズ音だけ。どうやら向こうでもなにかあったようだ。そしてある一軒の家に入った。

家に入ると一人の傷を負った人が入っていた。

「どうしたんですか！！その傷。」

「静かにしろ！！奴らは音に反応する。」

「音？」

「そうだ。それよりあんたは管理局か？」

「はい。どうなってるんですか？」

そしてそのひとは語りはじめた。

「それは今朝のことだ。俺達はある街で暴動が起きていることを聞いた。それを俺達は鎮圧しに行った。しかしそこは地獄だった。人が人を喰う。そんな光景だ。確かに俺たちは色々なことを経験してきていたがこんな状況は初めてだった。そして収めるために魔力弾をうった。しかし、何度撃っても奴らは止まることはなかったんだ。そのうちに仲間の前に来て腕に噛みついた。そして仲間が一人負傷した。俺達はこのままじゃまずいと思い近くにあったショッピングモールに逃げ込んだ。しかししばらくして仲間のひとりが急に暴れだした。そして他の仲間にどんどん噛みついた。俺達はようやくあることに気がついた。それは噛まれたら感染するってものだ。俺の仲間のひとりがこいつらは死んでいるといい自分を犠牲にしてまで調べてくれた。それから殺傷モードに切り替えた。ぐはぁはぁはぁ。」

いきなり吐血した。

「大丈夫ですか！！」

「ああ。それから・・・・・・最初は胴体を撃ったが全然効かなかった。でも頭に当たった一つの弾があったそしたら奴らの動きが止まった。これが言の真実だ。はぁはぁはぁ、奴らに合ったら迷わず殺せ。そうしないとやられる。・・・・・・・・・俺はもうダメだがこれを持っていけ、きっと役に立つだろう」

するとひとつのディバイスを取り出した。銃型のディバイスだ

「これはなんですか？」

「これはクロスミラージュと言うものだ。最新型のディバイスだ。お前のディバイスはあんまり使えないだろう。これならきっと役立つ。どうかこれで一人でも多くの民間人を守ってくれ。」

そういって受け取ったと同時に血を吐いた。

「どうやらここまでのようだ。いけ！！」

「しかし・・・・・・」

「いいからいけ！！若造。俺達の願いを届けてくれ」

そう聞いて俺は頷き出て行った。俺が出た瞬間後ろから銃声が聞こえた。最後まで人間でありたかったのだろう。

俺は一生あの人のことを尊敬して生きていくそれがあの人の望んだ運命であり、俺の人生だ。

ここから生き残ったら供養をしよう。俺が生き残れるために。そうして俺は出て行った。

第6話　寝言と危険と現実逃避（後書き）

この物語はオリジナルディーダの最後？をつづった物語です。

さてさてどうなるこの男。生きて家に帰れるのか！？

そして最愛の妹ティアナに会えるのか！？

では次回をおたのしみに～♪

第7話　化物（前書き）

今回はあの化け物たちが登場！？
緑色の化け物などにどうやって立ち向かうか！？
ではどうぞ・・・

第７話　化物

ディーダがクロスミラージュを手に入れたその頃。

我らが主人公は・・・・・

「・・・・・・ＺＺＺＺＺ・・・・・・・・・ＺＺＺＺＺＺＺ・・・・・・・やべぇ・・・・・・・・・・ハン△ーが出てきた・・・・・・・ＺＺＺＺ・・・・・・・・リ×カもいるよ・・・・・ＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺ・・・・・・やべぇ・・・・・・・・・・・・タイ□ントまで出てきた・・・・ＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺなんて言う無理ゲーＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺ」

『マスター何か言いました？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

『寝てますね』

「・・・・・・・・・・・・ＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺはぁやべぇ」

主人公はこの地獄に無意識のうちに新たな爆弾を落としたのだった。

ディーダサイド

「アアアアアアアア・・・・・・・・」

「くそっ！ここにもいやがる！！！ドンドンドン！！」

俺は今あのおっさんからもらったディバイスで戦っている。

なんとか奴らの対処方法が分かったが、今は身を隠せる安全な場所が必要だ。

さっきみたテレビによると全世界が同じようになっているらしい。

くそっ！俺はこんなことをした奴を絶対に見つけてやる！！

俺は近くにあったショッピングモールに逃げ込んだ。どうやら先客がいたらしい。子供のようだ。

「大丈夫か！？」

「はい。僕達はあの化け物が現れたので急いでここまで避難してきました。」

「他にも子供がいるのか？」

「はい。あと7人ぐらいいます。大人はいません」

どうして大人はいないのかわからなかったがどうやらみんな傷はな

いようだ。

この子供たちを仕切っていた人物はさっき俺に話しかけた男の子

「あのぅ～どうしてこうなったのかわかりませんか？」

「すまない。俺にも状況がわからないんだ。それよりバリケードをつくろう。」

そう言って俺はバリケードを作り始めた。

これでしばらくはやつらの侵入を防げるだろう。

そのあと他の入り口等をバリケードを作りしのいだ。

「それより自己紹介をしよう。このままでは不憫だ。」

「わかりました。」

そして皆を一斉に集めた。そこにいたのは男が４人女が３人だ。まず女の子の方から説明された

「わ、私はレイ・ベージュです。一応ディバイスで槍術が使えます。寝台中学の３年生です」

「私は　サエ・クルージュ。剣術が使える。私も寝台中学の３年だ」

「アタシは　ミラン・タルクニールよ。一応周りから天才って呼ばれているわ。アタシもの寝台中学２年生よ。」

そして次に紹介されたのが男子たちだ。

「俺はレオン・グーラです。狙撃が得意です。俺も2年です」

「俺はセイ・レックラーンだ。俺はセイハイチュウだ。そっちにいるのがドウ・リーンこいつも俺と同じだ」

「よろしくお願いします。」

「そして最後は僕です。いちおうこのグループのリーダーをやらせてもらってます。寝台中学のセイント・ドールです」

そうして俺のターンになった。

「俺は時空管理局二等陸士ディーダ・ランスターだ。ティーダでいい。よろしくな。」

こうして俺たちの繋がりはできたのだ。しかしこのとき俺ははっきり言って油断していた。今着々とこちらに近づいてきている化物の存在に・・・・・・・

二日後それは突然やってきた。

「おい。一人足りなくないか?」

俺は人数が足りないことに気づき、タカシに話しかけた。どうやらドウと言う子がいないらしい?どうせトイレでも言ったのだろう。

しかし、何時間経っても帰って来なかったので不振に思いみんなを集めた。

「みんな様子がおかしい。ちょっと見てくるからここに集まっていてくれ」

「どうしたんですか？」

とレオンが聞いてきた。その詳細を話しみんな納得してくれた。

「これを持っておけ。これは一個数十万するディバイスだ。使い方は解るだろ？」

「はい。わかります。必ず戻ってきてください」

そう言って俺は館内の探索を始めた。暫くするとドウは見つかった・・・・・・・・・・見つかったのだが・・・・・・・・・・・・・・・

「な、なんだこれは！！！うううぇぇぇぇ」

それは既にドウのものではなかった。

胴体が割れ、折れ曲がり、顔は原形を留めていない。

唯一わかるのがドウが身につけていた服のみ。

それ以外はなかった。

しかし誰がこんなことをしたのだろう。

どうやっても化け物がやったに違いないが、バリケードを破られた形跡はない。

するとひとつありえない考えが浮かぶ。そしてそれに対し本能がこう叫ぶ。

――――子供たちが危ない！！！と

俺は必死に走り出す。

すると一つの悲鳴が上がった。

それはセイのものだ。

「どうした！！」

と俺が叫び戻ってくるとタカシがディバイスを構えて何かに向かっているそれは・・・・・・・緑色をした化物だった。

「GYAAAAAAAAAAAAAAA！！！」

叫びながらこちらに向かってくる。それを俺は構えて

「こっちだ！！！」

そういって誘導する。途中で通機構の壊れた部分があった。どうやら通機構から侵入したらしい。

「くそっ！どういうことだ！！さっきまではこんな奴いなかったぞ！！！」

俺はクロスミラージュを構え撃つ。魔力弾はその化け物に当たった

がどうやら死んでないらしい。やはり頭をねらうしかない・・・・・・・・・・・

俺が考えたときだった。そいつは一瞬の隙をついて襲いかかってきた。万事休すか・・・・・・・・・・・あきらめかけたときだった。

「ディーダさん！伏せて下さい！！」

すると銃声が何発か聞こえた。パンパンパン

目を開けてみるとみるも無残な姿になっている

「凄いな・・・・・レオン・・・・・・・助かったよ。」

「お安い御用ですよ。それよりセイの治療を！！」

「ああわかった。」

そう言って俺たちは持ち場に戻った。

こんな化け物がうようよ居るのだったらここも危ない。

俺達は脱出経路をどうにか確保しなければならない。

そしてこう思う。

ここを移動しようって。

これが凶とでるか吉と出るか分からないが、そう思う。

そして決断のときは着々と迫ってきていたのだった。

第7話　化物（後書き）

どうでしたか？
感想お待ちしています！！

では次回予告ということで

次回・・・遂に脱出を図るディーダ。
だが、ディーダたちの前に立ちはだかる敵！
そして動き出す我らが主人公。
ディーダたちはこの地獄から抜け出すことは出来るのか！？

では次回出会いましょう。

第8話　決死の脱出（前書き）

とうとう動き出す主人公、

脱出を図るディーダ達の運命は！？

ではどうぞ・・・

第8話　決死の脱出

「みんな聞いてくれ！俺は今ここから脱出しようと思う！！」

俺が言ったことにみんなどうして？という顔をしている。そういう反応は慣れていた。

「アタシもそれがいいと思う」

ミランが同意。これには俺も少し驚いた。男が言うならともかく女の子がそういっているのだから・・・・・

「どうして・・・・・・・・・・・・・」

ふとそう言う言葉をつぶやいてしまった。これは不覚だ。

「そんなの決まってるじゃない。ここはさっきみたいな化け物が入り込むかもしれないか、もっと安全な場所を見つけたほうがいいわ。それにここじゃいつ救助が来るか分からないじゃない？」

「確かにそうだな・・・・・・・・でもこっちはけが人がいるよ？」

「確かにな・・・・・・・・それよりも」

と言ったところで不意に俺の昔から使っていた相棒のディバイス。名前はシルバーロードがビビビと反応した。

これは魔力反応だ。

「ちょっと待ってくれ・・・・・・・・・・この魔力は・・・・・
転送ポータルの魔力？しかしどうして？・・・・・・・・・・」

確かにおかしい。
転送ポータルは全て使えなくなっていたはず・・・・・・まさかま
だ使えるのがあったのか？
しかもこの反応は結構近くにある。
病院内の死体安置所だ。

「どうやら言ってみるしかないようだな。俺はこの転送ポータルが
ある場所に行ってみる。一緒にいくものはいるか？」

そうしたらみんな同意した。
ここにいても仕方ないのだろう。
いつ襲われるか分からない中こんなところにいては全員が死ぬのは
確実。
ならかけてみるのもいい。あのおっさんとの約束を果たすまでは・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ティア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺必ずティアの誕生日までは・・
・・・・・・ティアのために生き残って見せる！

「じゃあ出発は明日だ。今は休んでおけ！」

そうだティアを守るために俺自身を守るためにそして・・・・・・・
・子供たちを護る為に戦って勝ってやる！！脱出して。

翌朝

ショッピングモールないの屋上から窓の下を見るとやはり奴らはいた。しかし前と違ったのはそのやつらと同じようにで買い化け物やら俺達を襲った化け物がいたのだ。
これは早急に脱出しなければやられる・・・・・・壊されると思いみんなを集めた。

「おい。顔色が悪いぞ？大丈夫か？」

俺はセイに訪ねた。どうやら昨日の傷がまだ痛むようだ。

「はい。大丈夫です。」

そう答えたのだった。
しかし俺はこの時気づくべきだったかもしれない。その傷の意味に・・・・・・

「よし。これより脱出を始める。さっき調べたところによると裏口にはやつらの気配はなかった。だから奴らが来る前に裏口から脱出。その後に中央病院に向かう。準備はいいか？」

「「「「はい」」」」

「いい返事だ。行くぞ！！」

そういって突撃した。案の定裏口には何もいなく、そのままスムーズに行くかと思われた。
だが・・・・・・・・
そううまくいくほど世界はできてない。
ふと何かの足音に気がついた俺はみんなに避難指示を出し、迎え撃

った。
そこにいたのは・・・・・・・・・・
人間の姿をしているがやつらではなく、もっと恐ろしい奴だった。
俺はディバイスを構え、撃つ。しかしそれを簡単によけ、こちらに向かってくる。
どうやら反射神経は人の数倍はあるらしい。普通は至近距離からの攻撃をよけれるほうが奇跡だ。それを簡単によけたということは・・・・
一瞬不意に嫌な光景が浮かんだ。しかしそれをもみ消して再び攻撃する。

「くそっ！このままじゃ当たらない。誰か援護してくれ！！」

俺は不甲斐なく子供達に頼ることに、そしてセイントとレオンが名乗り出てくれた。

「ディーダさん。俺がヤツを少しひきつけます。合図を送ったら撃ってください。」

セイントがそう言ってきた。俺は普通なら反対するだろうがセイントの目には強い光が見えた。だから信用することにした。
ドンドンドン

「こっちだ化物！！」

すると奴は向きを変えてセイントに襲いかかってきた。それをがセイント避ける。そして逃げまた避けるの繰り返し、そしてしばらくが経ち

「今です！！！」

合図が来た。その瞬間俺とレオンは一気に撃つ。一つの魔力弾が幸運なことに頭に当たりそいつは死んだ。しかしまだ安心はできない。

「今ので結構音が出た。皆、急ぐぞ。」

そういい俺達は再び目的地を目指した。目的地までの道のりは結構なものだった。

まずおかしなことに病院に近づく度に奴らの数が増えている。

これはどう見てもおかしな話だ。そして俺は不意にあることを思った。

――――――もしかして俺達以外にも生存者がいる？――――――

でもそれだとしたらおかしい。

何故病院内にいるのに転送ポータルへ向かわない？そう考えられる。

さらに二つの案が浮かんできた。

一つ目は出られない状況にある。

それはどこかの一室に立てこもっていて外には奴らがうじゃうじゃいる。

この場合は俺は助けることができない。

そして二つ目は、この状況を作り出した犯人。

犯人だったら逃げない理由もあるだろう。しかしこの二つ目の案は

まだ予想でしかない。

この世界にそれほどの技術力はないのだから。

多分どこを探してもないだろう。なので俺はこの案は却下する方針で行った。

まず第一優先は子供たちの脱出経路を確保。そしてティアに誕生日プレゼントを送る事だ。それを胸に刻み込み進んでいるといつの間にか病院前だった。

「・・・・・・・着きましたね・・・・・・」

「・・・・・・・ああ・・」

「なんでしょうね？あれ？」

「俺に聞くなよ。本当にどうしよう」

なんの会話をしているのかというと病院前には大きな姿をしたばけもの5対とさっき戦った人間サイズの化物3体、そしてドウ君を殺した緑色の化物2体が待ち構えていた。この光景は絶望だ。しかし幸いなことに奴らの気配はない。この化け物たちが関係しているのだろう。

「転送ポータルの場所は分かるか？」

子供達にそう聞くと、

「私、わかるわ！！」

とサエさんが答えてくれた。でも入ろうとするにはまず奴らをひき

つけないといけない。
どうするか・・・・・・・と思ったところでセイの様子がおかしいことに気がついた。俺はまさかと思い、セイントを突き飛ばした。
「ぐっ！」
その瞬間手を噛まれた。どうやら感染していたらしい。
「ディーダさん！！」
駆け寄るセイント。俺はこいつにトドメを差し、大丈夫だといった。まさかとは思ったがあの化け物に傷を負うと発症は遅いがやつらと同じになるらしい
「俺はもうダメだ。俺がひきつける。その間に転送ポータルへ向かってくれ！！」
「駄目です。皆で帰るんです！！」
「しかし・・・・・・・・」
何かの気配がした。誰かに見られているような気配が。しかし、気のせいだろう。
さらに考える事数秒。俺はある案を思いついた。それは・・・・・・・・・・といったところでみんなに作戦を話し、準備を始めた。

主人公ｓｉｄｅ

「ん～！よく寝たぁ～。あれ？ここは？」

俺は寝る前に何があったのかを覚えておらず、ジェルに尋ねた。

『お～い。ジェルゥ～』

『どうしたんですか？マスター？』

『ここどこだが分かるか？』

『下を見てみたらどうでしょう？』

『した？』

そして俺は下を見た。どうやらここはどこかの屋上らしい。下を見ると辺りは化物やら化物やら化物やらまあとにかく化け物が多かった。

『どうやらここにいた人達はあの化物たちにほぼ壊滅させられたようですね』

「壊滅って。だいたい何人ぐらいいたんだ？」

『だいたいですね・・・・・・地球と同じ人口ぐらいですかね。ちなみに後数人生き残っている人達がいましたよ』

「へぇ～。それって治す事できないの？俺の力使って？」

『できますが・・・・・・・・・頭が一瞬のうちに死滅して首なし

人間となってしまいますが？』

「なら使うの止めよう。どうせ人間いつかは死ぬんだし。」

『そうですね。死んだあとも歩けるって幸福だと思いますよ』

「そうだよな。まあいいや。さっさと別の世界に飛ばしてくれ。」

『わかりました。さっさといきましょう。』

そういい残すと俺達はこの場から消えた。この光景を目撃していた子供達がいたことを知らずに。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「準備はいいか！」

「「「「「はい！！」」」」」

そういうと作戦を開始した。この作戦は誘導作戦だ。まず大きな音を発する物で相手をおびき寄せる。いい具合におびき寄せた所で病院内に侵入。

そして転走ポータルのところに行き脱出といった具合だ。結果からいうと作戦はうまくいった。大半は引き寄せられ違う方向に向かった。俺達はその間に侵入を成功し、転送ポータルがある屋上へと向かった。だが、何かの拍子に音が出てしまったのだ。その音に引きつけらた奴ら＆ａｍｐ；化物はこちらに向かって来る。俺達は全速力で上の階に向かった。

「早くいけ！！ここは俺が持ち堪える。さあ！！」

そういい俺はクロスミラージュを手に取り、緑色の化物に向かって射撃。緑色の化け物は倒せたが次々と上がってくる

「まだか！！」

「もう少しです！！」

そういって俺は後退しながら射撃していった。俺が屋上につくとみんなは何かを見たような顔をしていた。どうしたのだろう？
とりあえず転送ポータルを起動し、そこに子供たちを集めた。
次の瞬間だった。ドカン！！
いきなりドアが破られた。そこには大きな化け物がこちらを見ている。

「早く乗れ。それとこれをティアナという子に渡してほしい。それとこのディバイスも・・・・」

俺は手に持っていたぬいぐるみとクロスミラージュをセイントに渡した。

「え？何を言ってるんですか？」

少年達はまだ分かっていないらしい

「俺はいけない。俺はもう無理だ。だからお前らが行くまでの時間は稼いでやるよ。」

「そんな！！病院に行けば治ります！！」

最後まで俺のことを心配してくれるのか・・・・・・優しいな君達

は。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第8話　決死の脱出（後書き）

直「よし！久しぶりのあとがきだ」

ジェ「そうですね。それにしてもマスターが寝ている時間は暇でしたね。なんか化け物まで出てきましたし。」

直「なあ？あの化け物ってバイオな化け物に見えたけど？」

ジェ「ハッハッハ。そんなわけないですよ。あれは別の作品ですよ？私達が出ている魔法少女の世界にそんなことをあったら怖いじゃないですか。」

直「確かにな。それは怖い。だけどクローン居るんだし、居るんじゃない？」

ジェ「確かにいるかもしれませんね」

直「だろ？」

ジェ「ええ。」

直「続きが気になるが次回予告と行くか。」

ジェ「そうですね。作者。よろしくお願いします」

了解！

では次回は
「一人残ったディーダランスター。立ち向かうのは巨大な化け物だった。
　そして守られた子供たちの運命は？」
次回出会いましょう！！

第9話　死してなお受け継がれる想い。（前書き）

さてディーダの運命はいかに。
お楽しみください！

第9話　死してなお受け継がれる想い。

シルバーロードを構え、転送ポータルに向かって発射した。

なぜ発射したかというとこの状況だ。

万が一にでも他のところに奴らが転送してしまえばその世界は終わってしまうからだ。

そして俺はもう助からない。

だから俺は手に持っているシルバーロードを構え、化け物に向かった。

想えばこいつとも長い中だ。

確か俺が１２のときに金がないので自分で作った以来の物だ。

これは俺にとっての相棒。そして死してゆく俺に向けられている最後の思いかもしれない。

息を整え痛む傷を抑え、自分と自分の不甲斐なさに笑った。

（あ～あ。ティアが言ったことが本当になったな。）

多分あの時普通に帰って入ればこんなことにはならなかったに違いない。でも・・・・・・・・・・・・・

こんなことがあったからこそ子供たちを助けることができ、あのおっさんや他の人々にも出会えたのだろう。さあ最後の仕事に取り掛かりますか・・・・

「覚悟しろよ。化物！！」

そうして化け物に向かって撃った。しかし、それは当たることなくかわされる。

「くそっ！あの体格にしてあのスピードかよ。反則だ。」

魔力弾を再び装填して撃つ。

しかしまたかわされる。

これの繰り返しだ。

でもあることにより状況は一変した。

俺がふと目を話した瞬間。

「ぐはぁっ！！」

これを好機とみた相手が俺に向かって攻撃してきたのだ。

当然避ける術はない。

終わったなと思ったところでなんとシルバーロードがバリアを張ってダメージを軽減してくれたのだ。

「はぁはぁ。・・・・・・・・まだだ。」

俺は力なくディバイスを構え、敵に向かう。

これがおそらく俺にとっての最後の攻撃だ。

出し切る力を全て出し、敵に向かう。

「これが俺の最後の技だ。全力全壊で行くぞ！！セントラリーミラージュ！！」

この技はまだ未完成だが今出せる最大の技だ。この技の特徴は幻術を本当にするという技。よって創り出される多くの武器。剣、槍、刀、銃、斧、短剣、他もろもろ。

それを一気に相手に突き刺すと言う技。作り出せるだけ作り出す。そして優に１００本以上を超えたとき、相手にそれをイッキに突き刺した。

いっけぇぇぇ！！！！」

相手の身体全体がえぐられる。

暫くすると敵は絶命した。

しかしこの技には副作用がある。

相手がくらった分のダメージを自分も喰らうことになる。

なので最後の切り札なのだ。俺は薄れゆく意識の中、こう思った。

（ティア、セイント、レオン、サエ、レイ、ミラン・・・・・・・・・・みんな生きてくれ。・・・・・・・・・・・・・・・・俺の分まで・・・・・幸せを。）

「はは。最後にまた”あいつ”と会いたかったな。元気にしていればなによりだが・・・・」

家族・子供達・・・・そして昔の親友のことを想った。そして・・・・

その瞬間ティーダ・ランスターの意識はものすごい激痛と共に消滅したのである。

セイントｓｉｄｅ

「ん？ここは・・・・・・・・」

僕が起きると知らない天井だった。

僕は今まで何を・・・・・・・・・・・・・・・・あっ！そうだ！！みんなは！！ティーダさんは！！！

あたりを見渡すといきなりドアの方から声がした。

「あら？起きたの？」

見る限り看護婦さんらしい。

「大丈夫？顔色が変よ？」

声をかけられたので返した。

「はい・・・・・・それより僕と同じくらいの子供達がいませんでしたか？」

「ええ。いたわ。みんな無事よ」

「そうですか。・・・・・・・」

とりあえず一安心だ。しかし一番聞きたいことが他にあった。

「あのぅ～僕たちより少し歳があった男性見てませんか？」

「いいえ。貴方達だけよ。」

返事は即答だった。つまりティーダさんは・・・・・・・・・もう・・・・・・・

「それにしても貴方達はどこからきたの？転送ポータルの前で倒れていたけど。」

「はい。・・・・・・・僕達は第４５管理内世界からきました。」

言った瞬間空気が凍った。そしてあることを口走る

「まさか・・・・・・・本当に？」

「はい？」

「第４５管理内世界は確か１０日前に封鎖されたと聞いたわ。確か誰かがバイオテロを起こしたそうね。」

「封鎖？」

「そうよ。でもおかしいわね？全部封鎖したと聞いたけど・・・・・・どこの転送ポータルからきたの？」

「中央病院です。」

「中央病院？・・・・・・・・ああ！確かあそこって臨時用の転送ポータルがったわ。それでね・・・・・・・」

それからいろいろ聞いた。その世界・・・・・・・僕らがいた世界で何が起こったのか。

そして話した。僕らの生き抜いたあの地獄の一週間を。

一生忘れることの出来ない時間を。

大切な仲間たちとの時間。唯一僕たちを逃がしてくれた管理局の人の事。

そして僕はその人がなりたかった執務官を目指すだろう。

助けてもらった命をまたあの人の様に他の人を助けられるように。

そしていつの日か自分であの真実を確かめれるように、僕は退院後ティアと言う子に会いに行こう。

そしてあの人の勇姿をはなそう。

そう胸に刻み込んだ僕は今はもういない彼に向かって敬礼した。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ふぅ～それにしてもさっきの世界。気持ち悪かったな」

『そうですね。あの世界は衛生が悪かったです。』

俺は今海が見えるところに来ている。青空は綺麗にすき通り、海はそれを移し、青く染まっている。それにしても

「平和が一番だな！！」

『そうですね。さっきみたいな世界には行きたくないですね。』

俺達は笑いあい、海を見ながらこの世界のことについてこう思った。

「『やっぱり平和が一番だな（ですね）』」と笑いながら言っていたのであった。

第9話　死してなお受け継がれる想い。（後書き）

ジェ「それにしても気づかないことって罪ですね。」
直「？いきなりどうしたんだ？」
ジェ「いいえ。」
直「でもさっきの世界は気持ち悪かったところだけど・・・今回の世界もなあ～」
ジェ「確かに一見普通そうにみえますが周りがですね・・・」
直「そうだね。じゃあ次回予告でも行きますか。」
ジェ「はい！作者よろしくお願いします」

次回

「転移した直樹達の前に現れる謎の幼女。
主人公に迫る幼女の真意とは？」

では次回で！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1359z/

とある男の不幸な事故

2011年12月17日10時47分発行